

小学校音楽

1 小学校音楽科の指導と評価について

(1) 指導計画の作成と内容

① 資質・能力の関連付け

ア 指導計画を作成する際は、各学年の内容の「A表現」の(1)～(3)の指導では、それぞれに対応するア「思考力、判断力、表現力等」・イ「知識」・ウ「技能」の事項を、「B鑑賞」の指導では、対応する、ア「思考力、判断力、表現力等」・イ「知識」の事項を適切に関連させる必要がある。各事項を全て網羅して指導計画を構成すること。

イ (3)の音楽づくりでは、題材を構成する際、資質能力の(ア)のまとまり、(イ)のまとまりとして、混在して扱わないように留意する。ただし、十分に時間が確保できるのであれば、(ア)のまとまりと(イ)のまとまりを関連付けて扱うことも可能。

② 題材構成の考え方

ア これまでは、一つの事項で題材を構成してきたが、関連させて題材を構成させることとなり、ねらいが多岐に渡ることになる。そのため、焦点化して題材を構成していくことが重要。

イ [共通事項]では、要素が要となるように計画をしていくことが重要。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

① 【対話的な学び】では、「対話をしているか」ではなく、その活動を通して他の人の知識や考えを活用して、新しい発想やアイデアを生み出していけるかという点が重要。

② 「共感」と「共有」の授業の中での扱いが、授業改善の視点につながるものになる。「共有」することは、誰が聞いても同じ捉えのもの。一方、「共感」は、一人一人異なるもの。それぞれの児童の考え方や感じ方を知り、自己の考えを深めたり広げたりすることにつながる。音楽科の学習の中では、このような共感したり共有したりするなどの学びが、授業改善の視点に大きくつながるものとなる。

(3) 小学校音楽科における指導と評価の一体化のポイント

① 題材構想の段階から音楽科において育成を目指す資質能力と評価を一体的に考えて構想することが不可欠である。

ア 内容のどの事項を題材の学習として位置付けるかを検討すること。このことによって、それらの教材や活動を通して何を学ぶのか、という学習内容を焦点化するとともに、評価場面の精選にもつなげることができる。

イ 思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素を明確化すること。その題材の学習において、子供の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にし、学習の中身を具体化するとともに、思考・判断・表現の評価規準に位置付けることで指導のねらいが明確になる。そうすることで、評価を指導の改善に生かしやすくすることができる。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」について

① 「主体的に学習に取り組む態度」の二つの側面

ア 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面

イ 粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

② 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

ア 「自らの学習を調整しようとする」とは、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意志的な側面。「意志的な側面」であるため、実際に「調整できているか」を評価するものではないということに注意が必要である。

イ 調整に向けたプロセスには一人一人の特性がある。その子供なりに、よりよく学ぼうとしているかを「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点状況を踏まえて評価を行う必要がある。

ウ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、努力を要する状況と判断されそうな子供への働きかけとして、次の三点が示されている。

- ・ 「めあての確認」では、学習のめあてを教師が適切に提示し、それに向かって子供が自

分なりに様々な工夫をして学んでいけるようにする配慮が必要である。今取り組んでいる活動が「何のためにやっているのか」ということを「子供と共有して」取り組むこと。

- ・ 「既習の内容の活用」では、題材の前時までの学習はもちろんのこと、これまでの音楽科の学習を振り返らせ、活用できるように促すことは、子供が自ら学習を調整するすべを得られるようになる上で有意義である。
- ・ 「協働的な学習を生かす」では、他者と協働する学習は、子供の感じ方や考え方等を深めていく上でも大きな意味を持つ。他の子供の学ぶ姿から、自己の学習について見直す機会を得るという点においても大変意義深いと言える。

2 小学校音楽科における1人1台端末の活用について

(1) GIGA スクール構想の下での小学校音楽科の指導において ICT を活用する際のポイント

① 音楽科における ICT 活用の利点

- ア 音楽を音声と画像との両方で確認することなどが可能であり、聴覚だけでなく視覚などを働かせながら音楽表現を工夫したり、音楽を聴き深めたりしていくことができるということ。
- イ 自分たちの演奏を録音や録画で残すなど、学習履歴を蓄積することができ、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができるということ。

② 全国の音楽の授業における ICT 活用の傾向

- ア 全国から報告されている音楽科の実践の半分以上が音楽づくりの実践であった。
 - ・ 【表現】の領域では、ICT 端末で範奏を聴きながら、各パートを演奏したり、自分たちの演奏を録音・録画するなどしながら表現の工夫をしたりする実践が多く、ICT 端末で音のつながりを様々に試し、聴覚や視覚などから音の組合せの特徴を捉え、自らの表現に生かす実践が多かった。
 - ・ 【鑑賞】の領域では、ICT 端末で自分が気になったところを何度も繰り返し聴いたり、クラウドを活用して感じたことなどについて友達と交流したりすることで、より深く音楽の良さを感じとることにつながるようとする実践が見られた。二つの領域に共通する活用の方法として、学習の振り返りや成果の確認に生かすなど、学習のポートフォリオとして活用する実践例が見られた。
- イ 実践例のキーワード
 - ・ 「技能力のカバー」、「音の可視化」、「主体的」、「一人一人（個に応じた）」、「共有」、「ポートフォリオ」、「評価」という言葉が多く見られた。

③ 留意点

- ア 児童の感覚を十分に働かせたり、思考を活性化したり、工夫を促進したりすることができるよう、音楽科の学習の特質に合わせた活用を行っていくよう配慮すること。
- イ ICT 機器の操作そのものが目的化しないように留意し、授業のねらいに応じて ICT 機器の多彩な機能の中から厳選して用いるようにするとともに、活用場面を精選すること。
- ウ 児童が自分たちの演奏のよさや課題に気づくようにしたり、必要に応じて児童が自ら機器を活用できるようにしたりするなど、主体的に学習に取り組むことができるよう指導を工夫すること。

3 参考となる資料について

- (1) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校音楽
(国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和2年3月)
- (2) 『初等教育資料』2021年7月号
- (3) 『初等教育資料』2020年9月号特集Ⅱ論説
- (4) 『初等教育資料』2020年8月号特集Ⅰ「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」論説事例6
- (5) 『初等教育資料』2020年2月号特集Ⅰ論説事例⑥
- (6) 『初等教育資料』2019年9月号特集Ⅰ「資質・能力の育成—『見方・考え方』を働かせることを通して—」
- (7) 『初等教育資料』2019年5月号特集Ⅰ「学習の基盤となる言語能力の育成—言語活動の充実—」事例6
- (8) 『初等教育資料』2018年6月号特集Ⅰ「資質・能力の育成に向けた授業づくり①」事例7